

公開研修会

NPOの20年と「積み重ね」のマネジメント論

5月23日（土）にすみだ生涯学習センター「ユートリア」に於いて、～NPOの20年と「積み重ね」のマネジメント論～をテーマに研修会を開催いたしました。ふるさとの会の職員研修ですが、公開セミナーとして外部からの参加もありました。

NPO 促進法案が制定されて、もうすぐ20年を迎えようとする節目の時期。NPOのマネジメントについて、NPO 法制の成立に尽力されてきた山岡義典氏をお招きして、ふるさとの会創業者であり、NPO 法人すまい・まちづくり支援機構代表理事の水田恵との対談を行いました。コーディネーターは相談室ふらっと顧問の佐藤幹夫氏が務めてくださいました。

ふるさとの会代表理事の佐久間裕章より、法人格取得以前のボランティアサークルとして活動を開始した前史からの成立過程をスライドで紹介し、次に山岡先生からの発表に移りました。

山岡先生からは「積み重ね」のマネジメントとは何かについてご報告いただきました。ふるさとの会における「積み重ね」の特徴として大きく4つがあることを指摘いただきました。

「関連組織の積み重ね」

→運動性の強い任意団体と事業性の強い法人組織を交互に積み重ねてきた。
土台としてのボランティアサークルの存続が人権感覚を養ってきた。

「施設の積み重ね」

→居住施設と非居住施設を交互に積み重ねてサービス内容を充実させ、就業支援の場ともしてきた。山谷地域での積み重ねを新宿地域に展開。

「制度活用の積み重ね」

→制度に乗らない自発的活動のうち制度が使えるものは独自の考えにより積極的に活用を積み重ねてきた。多様な法人制度も活用。

「共同居住支援と独居支援の積み重ね」

→共居で積み重ねてきた生活支援の発想と手法の蓄積が独居の生活支援の手法を豊かにした。寄り添い地域の考えや互助の地域展開など。

このように、重層的な「積み重ね」の上に現在のマネジメントが形成されてきたことを分析いただき、そのうえで、「積み重ね」のマネジメントは一般化できるかの問題提起をいただきました。

水田からは「単身困窮者への居住（一生活）支援事業のマネジメント」と題しての発表がおこなわれました。生活支援とは何か。「機能障害を生活障害にしない」生活支援であること。基本的信頼関係、イベント・防災・トラブルミーティングを通じた互助づくり（役割関係）の内容について具体的な事例を通じて説明し、弱い人が排除されない生活の互助をつくり、弱い人が住み続けられる地域づくり、それを可能とする寄りそい地域事業の展開を提案しました。

佐藤顧問は、制度論とケア論がリンクしてきたことをご自身の実感を通じて語られました。ひとりひとりのケアを考えることと仕組みづくり、マネジメントがつながってきているとの指摘をいただきました。その変遷を①「全体・みんな」を支援する時期（共同居住へ）→②ケアは個別へ向かう（「対人援助論」へという一個性と多様性の引き受け）→③「個」へのケアが「互助」に向かう（「利用者ミーティングと互助論へ」という時期）→そのうえで、現段階を④「互助」からコミュニティケアへ（「ケアと社会的不動産思想の合流」の時期へ）と段階を追って整理していただきました。

各人からのプレゼンテーションを受け、対談のかなで議論を深め、フロアからの質疑では、仙台からのNPO団体の参加があり、震災復興後の独居生活支援等の質問を受け、活発に意見交換が行われました。これまでの活動を振り返りながら、「積み重ね」の視点を踏まえたNPO マネジメントの考え方を学び、法人の成立背景、歴史も含めより深い理解を得る機会となりました。

山岡先生からは最後にふるさとの会の職員に向けて、これまでの歩み、積み重ねの自覚、これからは自分たちが作ってゆく自負を持つようにとエールをいただきました。「前史も含め、まるで自分が見てきたかのように、ひとりひとりのスタッフが20年の歩みを話せるようになって欲しい。そうしたらまた次の世代に伝わってゆく。それが可能となれば今日の研修の成果だ」と締めくくりのご挨拶をいただきました。

マネジメント研修の内容は今後、ブックレット等にまとめてゆく予定です。